

江戸の道具商・本惣

——了我、了芸の活動に注目して

宮武慶之

はじめに

本屋惣吉とは江戸時代後期に江戸で活躍した道具商である。屋号は名を略した本惣という。惣吉の名は二代統き、初代惣吉の号を了我^が（一七五三生）といい、了我の子で二代惣吉は号を了芸^{りょうげん}（藤吉／一八五七か一八五八没）という。了芸は文献によつて了雲と表記されるが、その理由は芸と雲が同じ読みであるためと考えられる。なお本稿では本来の表記である了芸に統一する。

『原色茶道大辞典』で本屋了我は

江戸時代後期の茶人。名は惣吉。古本商だが、深川冬木家が逼迫のため名物を松平不昧に譲渡するのを斡旋し、古本にひそめて運んだという話がある。道具の目利きになったともいわれる。九十余歳の長寿が伝えられる。^①

として紹介され、出雲藩七代藩主松平治郷（不昧^{ふまい}／一七五一—一八一八。以下不昧に統一）に、江戸の材木商冬木屋上田家^②（以下、上田家に統一）の道具を斡旋した人物として紹介されている。

天保初年に発刊された『江戸現存名家一覽』中、鑑定の項では了我と伏見屋甚右衛門（亀田宗振／生没年不詳）の名前が確認できる。^③

甚右衛門は茶入の目利きに優れた人物で、不昧にも多くの道具を取

り次いだ人物である。了我は天保年間当時の江戸における道具の鑑定家として重きをなしていたことが知れる。

このほか文献で確認できるものとして天保年間に成立した方外道人（生没年不詳）による『江戸名物詩（初編）』では、「本惣茶道具 新右衛門町角」とあり、当時の屋号を本惣といい本屋惣吉を略したものを使用している。店は江戸の新右衛門町角にあった。また同書では次のような記述がある。

青磁染付高麗物備前黄瀬戸古唐津所持道具多名器鑑定当今第一人⁴

青磁、染付、高麗物、備前、黄瀬戸、古唐津などを所持して道具も多く、名器の鑑定にかけては江戸での第一人であると紹介されており、江戸の道具商として一目置かれる店になっていたことが知られる。

従来、茶道具商の本惣および我、了芸についての先行研究はななく、その行状が部分的に語られているに過ぎない。これらのうち主要なものを挙げておくと美術商であった中村作次郎（一八五八生、没年不詳）による『好古堂一家言』（一九二〇）では、吉村観阿（白酔庵／一七六五―一八四八）と了我は、不昧の元に集った道具商のうちでも、俗気のない人物であったと記されている。また了我を本屋惣兵衛の名で紹介している⁵。このほか中村は明治四十五年

（一九二二）の新年宴会の席上で了芸について

只今でも箔屋町で金満家を以て知らるゝ、本総^{（マツ）}〔本屋惣吉〕の先代了雲と申した人は安政頃の大鑑定家⁶

と紹介している。

茶道史研究家の高橋義雄（箒庵／一八六一―一九三七。箒庵に統一）は『昭和茶道記』（一九二九）で、了芸により編纂された『鳳亀龍』を紹介するとともに、茶器の鑑定に優れた逸話を紹介している⁷。実業家で茶人の松永安左衛門（一八七五―一九七二）は『桑楡録』（一九四八）で了芸と親しかったのが古筆了仲（一八二〇―一八九二）であり、その没年が安政四年（一八五七）六十九歳で父よりはやく死んだと紹介している⁸。

また箒庵『近世道具移動史』（一九二九）には本屋平蔵について次のような記述がある。

本屋了雲^{（マツ）}の子の平蔵は、了雲が道具屋は二代続く商売に非ずとて、悉く其所蔵を売却した金を利用して自ら名器を買取つたので、当時仲間中の寵児と為つて居た⁹

平蔵は了芸の子であることが述べられると共に、父のような道具

屋は二代も続かない商いであるとして所蔵品をことごとく売却し、名器を買収したようである。そのため当時の美術商のうちでは寵児とみなされていたことが知れる。

茶杓に詳しい高原慶三（杓庵／一八九三―一九七五）は『茶杓三百選』（一九五四）で了芸について

本屋了芸は名は盈成、通称惣吉、本屋了我の子。茶具商から質屋に転業。鑑定に長ず。安政五年二月六日歿、六十九。¹⁰⁾

と紹介しているが、松永とは了芸の没年が異なっている。

陶磁器研究家の満岡忠成（一九〇七―一九九四）は『日本美術工藝』（三九六号、一九七二）で上田家の道具流出に了我が関係したことに加え、了芸の号が自直庵で、不昧から与えられたものと紹介している。¹¹⁾

以上の了我、了芸親子に関する記述の問題点は、了我の生没年や惣吉、惣兵衛などの名の出典が明らかにされておらず、その活動が断片的に語られてきているに過ぎないことである。また美術品との関係からも本惣は重要な店であるにもかかわらずその実態を明らかにできていない。

近代の本惣の形態を考えるにあたり、高橋龍雄（一八六八―一九四六）の『日本趣味十種』（一九二四）で「本屋了我のあとは、

京橋区にあり、東京市の一等公民の富豪であるということだ。¹²⁾」とあり、了我の子孫は旧京橋区に住居し、東京市の一等公民、すなわち高額納税者であったことが知れる。また斎藤博（一九三四―二〇〇〇）による『質屋史の研究』（一九〇〇）では、明治大正期の東京市の質商のうち、新右衛門町にあった太田惣吉が営んだ本惣を紹介している。¹³⁾ 新右衛門町という所在地から考え、了我の末裔と同一と定される。

そもそも了我は貸本屋から身を起こし、天保年間には新右衛門町で店を構え、江戸の鑑定家として重きをなした。その後も本惣は新右衛門町で営業を続け、近代では質商を営み、地主として活動していた。江戸時代後期に創業した江戸の道具商中、近代初頭まで同地で家を存続できたのは管見の限り本惣のみである。本惣の発展の経過を明らかにすることができれば、江戸における美術品の移動とともに、その交流から、当時の茶の湯文化の周辺を明らかにすることも期待できる。

そこで本稿では次の二点について論じる。

一点目は本惣と不昧との交流である。不昧に多くの道具を取り次ぐ一方で、不昧に近侍し、その用をなしたことが確認できる。特に道具の取り次ぎと、茶会への参加を中心に論じることとする。

二点目は本惣が天保年間に江戸で有力な道具商になっていた点に注目した上で、人と金の流れに注目する。人の動きに関しては、了

芸が長命であつた点に加え、子である了芸、また同じ新右衛門町に店を構えた本屋吉五郎の活動を考察の対象とする。金の動きに関しては、本惣の理財活動に注目する。近代の本惣は、質商と地主を兼ねており、金融と土地の観点から、本惣の初期の経営形態を明らかにする。

以上の二点を中心として、これまで明らかにされていない不昧と本惣の創業の関係を辿るのが本論の目的である。

一 了私の活動

(1) 出自と生年

ここで了我研究の上で重要となる了我的出自と生年の二点を紹介しておく。

一点目は了我的の出自である。了我は不昧以外にも新発田藩主溝口家に入入りしていた。新発田藩十代藩主溝口直諒（翠濤／一七九九—一八五八。以下、翠濤に統一）により安政元年に書かれた『三夢統録』（東京大学史料編纂所蔵）には、了我について次のような記述がある。

了我者、本貸売書為産、甚微賤也、蒙不昧公之厚恩而為骨董大家、公賜号瑞鳳庵、又賞監茶器之名高矣、了我有九秩寿筵之茶

会、因会其茶于別荘、又迄九十余歳、延召于吾茶会矣¹⁴

（了我は本と書を貸し売りにして産を為し、甚だ微賤なり。不昧公の厚恩を蒙りて、骨董の大家と為る、公より瑞鳳庵の号を賜わり、又、茶器を賞監するの名高し、了我到九秩寿筵の茶会有り、因りて其の茶を別荘に会す、又、九十余歳に迄るまで、吾を茶会に延召す）

了我は元々、貸本屋であつたが、その生まれは微賤の出であつた。不昧に見出され、瑞鳳庵の庵号を与えられ、道具の故実に詳しくかつ

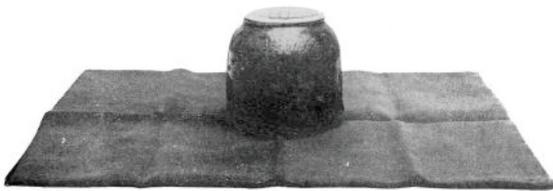


図1 橋姫手茶入銘「布引」（『赤星家所蔵品入札』より）



図1-2 布引に付属する本屋了我添状（『赤星家所蔵品入札』より）

た。了我は九十歳の時、茶会を別荘で催し翠濤を招いていたことが
知れる。この記録は了我を直接知る人物により書かれたものとして
貴重である。¹⁵⁾

二点目の了我の生年について、橋姫手茶入銘「布引」(図1)に
付属する本屋了我添状に注目する。赤星家の売立が大正六年
(一九一七)六月十一日に東京美術倶楽部で開催された。このとき
作成された売立目録が『赤星家所蔵品入札』であり、この茶入と添
状(図1-2)が所載される。添状には次のような記述がある。

橋姫手茶入

布引

右は宗甫公御所持秘蔵にて

御たんす三ノ引出に御入被置候を御代に

其まゝにて宗友公迄御伝来本家様

之由にて御秘蔵御座候由其砌拝見之者

委敷拙者へ物語に御座候、尤無類御品

に御座候需に應じてしたゞめ置候也

天保十二年丑 孟春

瑞鳳庵了我

米年有一

(花押)¹⁶⁾

天保十二年(一八四二)に八十九歳であることから、生まれは宝
暦三年(一七五三)であることが知れる。

(2) 不昧との交流

不昧と了我の関係を考えるとき、重要と思われるのが、不昧が朽
木綱昌(不見ノ一七五〇—一八〇二)に宛てた消息である。この消
息は『松平不昧伝』(一九一七)に所収され、全文は次の通りである。

御手紙拝見仕候、今朝の茶入伊賀と御目利に候、私も仕合いた
し候、御互に老衰眼力薄く、若手には及不申、只今は伏甚江戸
にての目利になり申候、本惣出精いたし候故、是老拳ながら目
利と成り申候、麻布は目利段々下り申候、凡謹而御拝見可被成
由、早く御目に掛度候、藤重、春雨は御印無之由、絵図追々に
はあげ可申候、御快く候はゞ、二十日過に必夜にひそかに御出
可被下候、段々御相談申度事多く候、底面茶入始めて御覧のよ
し、即御帰し落手仕候、柳藤四郎も手筋無之物にて候間、御覧
も被成度候はゞあげ可申哉、是はにく本名の茶入にて候、御返
事次第に可仕候、かなしやく、もはや道具買ふべき金とては、
百五十両斗に相成候、ゆく年を待申候也、穴賢く、

一々

表1 『雲州名物』にみる了我が不昧に取り次いだ作品

部	作品名	主要な伝来	購入年	取次	現在の所蔵
宝物之部	鍋屋茶入	冬木喜平次	文化元	本惣	
大名物之部	土田丸壺茶入	本多家	文政	本惣	
中興物之部	和文重刻 利休文重刻 澁紙手茶入	冬木	享和	本屋了我	東京国立博物館
	いらは茶碗銘千種	樽與左衛門		本惣	個人蔵
	伯庵茶碗	松平甲斐		本惣	
	達磨 澤庵筆	樽與左衛門	寛政	本惣	
名物並之部	黄瀬戸立鼓花生	庸軒	寛政	本惣	
	繩簾		文化	本惣	
上之部	とくや茶碗 銘朝露			谷権・本惣	
	釘彫いらは茶碗 銘山吹			本惣	山陰合同銀行
	青井戸茶碗 銘片山	樽與左衛門		本惣	
	鬼熊川茶碗 銘村雨			本惣	
	青磯部菊香合	大橋		本惣	
	織部香合 開扇			本惣	
	伊賀柳藍香合	冬木、仙波太郎兵衛		本惣	
	堆朱牛香合人物 イビツ箱遠州	樽與左衛門		本惣	
	両面達磨香合			本惣	
	黄成作			本惣	
	青磁燕花生			本惣	
	古七百	小堀		本惣	
	古銅八掛地紋花生			本惣	
	伊賀瓢箪花生	樽		本惣	
	唐物手付菜籠	樽與左衛門		本惣	
	茂古林墨蹟			本惣	
	利休述懐文	冬木		本宗(書か)	
	磯部、宗甫兩筆	樽與左衛門		本宗	
	花鳥二枚折探幽極			本惣	
	古法眼筆			本惣	
	遠州好茶箱			本惣	
	花鳥一元信筆			本惣	
	二枚折 書付探幽			本惣	

六月十一日

不見公

御返事¹⁷⁾

不見、不昧共に老眼とあることから老年期と考えられ、寛政期から享和二年(一七八七―一八〇二)までの間に書かれたと推定される。文中に「本惣」と書かれており、若い頃の本屋惣吉すなわち了我と目される。不昧は了我が中年にさしかかり目利きとなつたことを昌綱に報じたものである。この当時、了我は三十七歳から五十歳までの間となり、この時期すでに不昧と交流があつたことが確認できる。

了我と不昧の具体的な交流として道具の取り次ぎがある。不昧のコレクションは『雲州蔵帳』¹⁸⁾として全貌を知ることができる。同書には購入金額、時期、取り次いだ道具商の名前も記載される。了我の取り次いだ作品を一覧としたのが表1である。了我が不昧に取り次いだ作品のうち、現存する作品と、その所蔵者、譲渡された時期を挙げると次のようになる。

千利休作竹花入銘「園城寺」(東京国立博物館蔵。図2)と付属する利休筆消息「武蔵燈の文」(東京国立博物館蔵。図3)は冬木小平次が所蔵していたが、文化元年に了我の取り次ぎにより不昧に譲渡された。中興名物茶入「潮路庵」(個人蔵。図4)と中興名物「冬

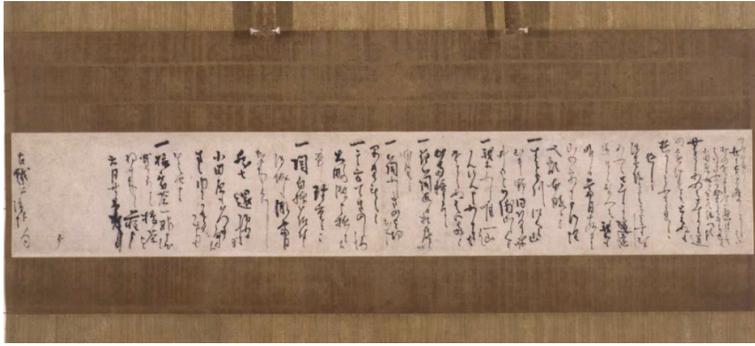


図3 千利休筆「武蔵鎧の文」(東京国立博物館蔵)



図2 千利休作竹花入銘「園城寺」
(東京国立博物館蔵)



図6 高麗釘彫伊羅保茶碗銘「山吹」
(山陰合同銀行蔵。『大名茶人松平不昧展』より)



図5 中興名物「冬木伯庵」
(五島美術館蔵)



図4 中興名物瀬戸洗紙手茶入「潮路庵」
(個人蔵)



図7 伊賀伽藍香合
(東京国立博物館蔵)

不詳)が所蔵したが、これらの入手時期は不明である。
このうち購入年の比較的早いものが「冬木伯庵」で、寛政年間に本惣から千両とあることから、その時期、すでに道具の取り次ぎを行なっていたことがわかる。²⁰⁾
その後の記録では不昧の茶会記中、了我が招かれた早い頃のものでは文化三年(二八〇六)五月二十二日、「御隠居様大崎へ御移徒初めての御会」として川村及夢(生没年不詳)、惣吉、伏見屋甚右衛門らとともに参会していることが確認できる。このとき了我、五十四歳である。

このように了我は不昧に近侍し、道具の取り次ぎなど道具商としての一面が見られる一方で、茶会の客としても交流のあったことがわかる。了我が不昧に近侍していた点について考えるとき、藤間寛氏は「雲州家蔵帳併写本一覽」(『雲州蔵帳図鑑』所収)のうち、文化年中に了我による筆記として『宝物之

部』(一冊。二十枚)、『名物並茶入之部』(一冊。五四枚)を紹介している。⁽²¹⁾このことは我が不昧に近侍し、その所蔵した道具の整理を行なっていたものと考えられる。

このほか了我は不昧による大圓庵寄進にも関係している。不昧は寛政五年(一七九三)に焼失した孤篷庵の再建に尽力し、孤篷庵内に菩提所となる大圓庵を寄進することとなる。

大圓庵造営に関して、不昧より大徳寺孤篷庵七世の寶海宗峻^{かんかいしゆん}(一七五二―一八一七)への消息中、次のような記述がある。

残暑強御座候得共、彌御万福珍重奉存候事々心掛候得共、彼是と故障御座候て、末上京も延引、何卒当秋末は、上京可仕と存候へども、是亦決定も末致候、何分罷上候心には御座候、定めて御待の御事と心せき申候、先達江戸より上り候本屋惣吉と申者、数寄屋庭廻り見候由、委細咄承り、一入早く見申度、十ヶ九ツは、秋中出京の積に候。一、其表道具屋仕候谷松屋貞八と申者、事々江戸へも下り、目利を出精仕候者に御座候、何卒龍光院什物、栗柿の絵、曜変天目、蜜庵墨蹟^{みつあんぼくせき}、是等を拝見願申候。乍御面倒可相成ば御見せ可被下候。於私忝可存候、御頼申候、

不昧一々

七月二十三日

孤篷庵老和尚

二空下⁽²²⁾

この文面から了我は一足早く、不昧の意を受けて孤篷庵に赴き、数寄屋や庭廻りの様子を報告していることが知れる。

文化十四年正月十三日に松江を出発した不昧は、二十五日の大徳寺孤篷庵に寄進した茶室大圓庵の披露の茶会を行なっている。まず二十五日の茶会では、不昧は宗峻、大徳寺孤篷庵八世の大鼎宗允^{だいていしゆん}(二七七五―一八三二)、今宮宗了(生没年不詳)⁽²³⁾を招いた際に用いた道具は、不昧が孤篷庵に寄進した道具が主である。なお二日後の二十七日、亭主が宗峻で、客として不昧、根土宗静^{ねつちしずせい}(孤輪庵/生没年不詳)、了我の参会が確認できる。了我が同席している点に注目すると、大圓庵の造営に関しても了我は不昧の意を受けて行動していたと考えられる。

その後、不昧らは江戸へ帰府するに際し同年正月晦日、四日市の清水本陣に宿泊した。宿泊記録が清水本陣文書として、現在、四日市市立博物館に寄託所蔵されている。そのうち「文化十四年松平不昧様御宿割帳」(以下、割帳に統一)がある。この文書はすでに『四日市市史』で紹介され、その解説では出雲国松江藩主の松平不昧が、国元へ帰る際に四日市に宿泊したときの家臣の宿割帳とされる。⁽²⁴⁾しかしながら大圓庵の茶会のもの、不昧は大崎に戻っていることから、四日市の通過は、江戸への帰府であることがわかる。

割帳には次のような記述がある。

根土宗静 つたや

太田了我 新兵衛

正田一二²⁵⁾

根土宗静、正田一二、太田了我は四日市のつたや新兵衛の宿に宿泊した。宗静、一二は不昧の茶会に多く招かれた人物である。また太田了我とあるが、近代の了我の子孫が太田性を名乗っていることから、了我本人であると判断される。このことは管見の資料中、惣吉が太田姓を名乗っていたことが確認できる点でも重要である。

割帳からわかることは、家臣以外にも茶友を引き連れて宿泊していたことである。不昧が彼らを帯同しての清水本陣をはじめとする四日市宿の宿泊は、その数日前に行なわれた大圓庵披露の茶会に一同参会するためと考えられる。その中でも、特に了我は大圓庵披露の茶会の準備に際し、不昧の意を受け貢献した人物であつたと考えられる。

(3) 冬木屋上田家の道具

冒頭でも紹介したように了我は上田家の道具流出に関与したとされる。ここでは了我が不昧に取り次いだ上田家旧蔵の道具中、

千利休筆「武蔵鐙の文」(図3)に注目する。この掛物は、当初、江戸時代中期の江戸の商人上田小平次(生没年不詳)が所蔵していた。

小平次は千利休筆「遺偈」(不審庵蔵)を所蔵していたが、千宗左(如心斎、天然/一七〇五—一七五二)の懇望により、千宗室(又玄斎、一燈/一七一九—一七七二)、川上不白(一七一九—一八〇七)らの斡旋により入手した。入手に際し、千家から上田家に贈られたのが「武蔵鐙の文」と長次郎作黒楽茶碗銘「北野」(石川県立美術館蔵)である。

「武蔵鐙の文」を収納する箱(図8)には甲に「利休武蔵鐙文」と書かれ、裏には如心斎により



図8 千利休筆「武蔵鐙の文」を収納する箱墨書
左/裏 右/甲
(東京国立博物館蔵。『名物図鑑』より)

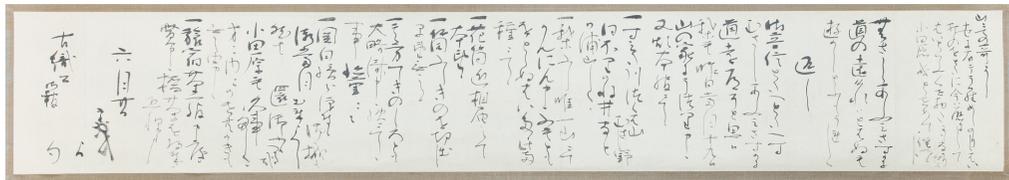


図9-1 不昧筆「武蔵鑑の文写し」(個人蔵)

(上段)
利休むさしあふみの文
(中段)
御音信／よに有テ／はといふ
(下段)
名に高き富士を詠て切出ス
ふしきの筒は園城寺也 一笑々々左(花押)

と書かれている。

その後、上田家では「園城寺」と「武蔵鑑の文」を、了我を介して売却することとなる。「園城寺」を入手した不昧は後年、園城寺花入の写しを三つ作っており、それぞれの銘は「昏鐘鳴」(個人蔵)、「入相」(いりあい)、「晚鐘」(田部美術館蔵)である。不昧作園城寺写竹花入銘「昏鐘鳴」には不昧筆「武蔵鑑の文写し」(図9-1)が付属する。「武蔵鑑の文写し」を収納する箱には「碧雲台」の貼紙があることから、近代になって益田孝(鈍翁)／一八四八—一九三八)が所蔵したことが知れる²⁶⁾。不昧による「武蔵鑑の文写し」を収納する箱には

了我による墨書があり、甲(図9-2)には「利休武蔵鑑文」
し」と書かれ、裏には先述の如心齋の配置をそのまま写し、次のような墨書がある。

御音信
(上段)
利休むさしあふみの文
(中段)
御音信／よに有テ／
(下段)
名に高き富士を詠て切出ス
ふしきの筒は園城寺也 一笑々々左(花押) 左判と如心齋宗左
書付有之了我證之(花押)

了我による墨書の年代は明らかにしないが、不昧に取り次いだ作品の写しを了我が墨書している点から、両者の関係を示す作品としても重要である。また了我が冬木道具の売却に関与している点も重



図9-2 不昧筆「武蔵鑑の文写し」を収納する箱甲(個人蔵)

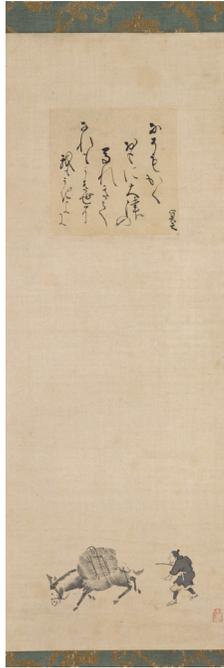


図10 松花堂昭乗筆「大津馬」(根津美術館蔵)

松花堂による大津馬(図10)は現在、根津美術館が所蔵する。⁽²⁸⁾ 同書によれば元は冬木家の伝来であり、本総すなわち本惣により流出された作品であり、このような上田家との関係があったことが確認

要である。
雲州蔵帳中、上田家旧蔵品を取り次いだ道具商では伏見屋が多く、本惣による取り次ぎはわずかである。また安永年間から上田家道具を取り次いだ伏見屋甚右衛門や河内屋宗海(生没年不詳)などと比較して、時期は寛政期からと後発である。しかしながら上田家と了我はそれなりの関係を築いていたようである。というのも朝岡興禎(一八〇〇—一八五六)による『古画備考』で松花堂昭乗(一五八四—一六三九)の項目には次のような記述がある。

松花堂昭乗
同 画大津馬、唐紙半切立物、賛沢庵、色紙に書て張、元冬木より、本総取出し、大坂河口にて落札五十両、其後莫大の価となる。⁽²⁷⁾

できる。

このほか、上田家の旧蔵品で本屋惣吉の箱書付があるものでは六閑齋泰叟(一六九四—一七二六)による共筒茶杓銘「瀬田夕照」(個人蔵)がある。『茶的三百選』(一九五四)によれば茶杓の替筒は竺叟によるもので、筒墨書には

六閑齋作 瀬田夕照 宗乾⁽²⁹⁾

とあり、内箱には同人により次のような墨書がある。

八景之内 瀬田夕照 最齋
庚戌歳 上田小平次殿へ送る (花押)

竺叟が江戸深川の豪商である上田小平次(上田屋冬木家三代目政郷の次男)に贈った茶杓であることが知れる。また外箱の墨書は本屋惣吉と紹介されている。惣吉による箱墨書は次のようになる。

八景之内 竺叟宗乾替筒箱書付
泰叟宗安茶杓 冬木小平次所持
袋書付 仙々斎筆

書式から了我によるものと考えられる。この茶杓は了私の活躍した頃に流出したものと考えられる。両者の関係を考える上でも重要な作品である。

(4) 了私の妻

産科医である片倉鶴陵（一七五一—一八二二／元周）により、文化五年に刊行された治験の記録である『静儉堂治験』（一八二二）の第三巻には次のような記述がある。

日本橋新右街、本屋惣吉ガ妻、心中悸シ、胸下痞鞭、臍上動氣アツテ失音不能開声、不大便五六日、時ニ復頭眩ス、脈沈細ニメ飲食不_レ進、他豎平肝流気飲ヲ用ヒ、其他数劑ヲ更テ不_レ効在_ニ床褥既_ニ二十有余日、文化辛未八月十五日、治ヲ予ニ求ム、予枳縮_ニ陳湯加_ニ桔梗_一与_レ之兼ル_ニ清心湯ヲ_ハ家方_{抽出シ}兼_チ方_{以テ}、臨臥_ニ龍飛丸_啓見_{傷寒}微_{五十粒ヲ}、每晚頓服セシム、大便利ヲ得テ、諸症稍快ト雖モ、唯_ダ音声不_レ発、悸動不止、十九日劑ヲ改テ、灸甘草湯ヲ用ル_一七八日ニメ、心中動悸止ミ、音声開テ常ニ復スル_一ヲ得タリ₍₃₀₎

本惣の妻の病状についての鶴陵の記録である。この症状について元日本東洋医学会会長の寺師睦宗（一九三二—二〇一八）によつて

『漢方医学講座』（六八号、一九九三）で紹介されており、引用しておくと次のようになる。

日本橋の本屋惣吉の妻、心中が悸して胸下痞硬、臍上に動悸があつて失音し、声を出して話すことができない。五、六日大便が出ない。時々眩暈がする。脈は沈細で食欲が進まない。そこで炙甘草湯を用いたところ、七、八日で動悸が止んで、声を発するようになった。₍₃₁₎

この症状について、玄和堂診療所院長の寺師碩甫氏の教示によれば、一概に断言できないとした上で、「十日以上、床に伏している様子や、声も出ず、脈も細く、食欲もないなどの症状を考慮すると、恐らくは体力の衰えた高齢の方ではないか」との教示を得た。完治した時期は文化八年（一八一一年）八月五日であり、この当時了我は五十八歳であることから、了私の妻と比定される。

(5) 老年期の了我

老年となつた了我は江戸で目利きとして聞こえ、本阿弥空中作信楽茶碗「鶴芝」_(個人蔵)、図11₍₃₂₎や杉木普齋作共筒茶杓銘「雪の朝」_(個人蔵)、図12₍₃₃₎などの作品に墨書を残している。これらはいずれも八十八歳、八十一歳の時の筆である。了私の八十歳代の活動に注



図12 杉木普齋茶杓歌銘「雪の朝」(個人蔵)



図11 本阿弥空中作信楽茶碗「鶴芝」(個人蔵)

参会している。天保七年は了我八十四歳となり、この茶会に参会していたのは了我と目され、当時の交流がわかる。

了我自身による茶会は先述の通り、卒寿(九十賀)茶会があるとされるが記録を確認できない。

ところで山本麻溪(生没年不詳)と、東京の茶商である木全宗儀(生没年不詳)により一年間の日別の茶会記を収集した『古今茶湯集』(一九一七)には、文政十二年巳丑正月二十五日に開催された

目するときは、江戸の材木商である川村伝左衛門による『寛政三亥年日記』(三井文庫蔵)には、天保七年十一月十一日に開催された茶会の記録がある。客は沼津藩家老の土方縫殿助(生没年不詳)、川

村伝左衛門(生没年不詳)、和泉屋喜平次(生没年不詳)、惣吉が

本屋惣吉による茶会が所載される。文政十二年(一八二九)は了我七十七歳となり、喜寿の茶会であると判断される。客は藪内紹安、勝与一郎、榎本飛驒、伊藤喜八(いずれも生没年不詳)である。当日の道具組みは次のようになる。

- 初座
- 掛物 元伯宗且筆一行 梅開去年枝
- 釜 丸 寒雉作
- 香合 交趾 笠牛
- 炭斗 木地台
- 灰器 吉左衛門素焼
- 羽箒 鶴
- 鉄 火筋
- 懐石
- 向付 たひらき 唐からし 酢みそあへ
- 汁 よめな
- 煮物椀 鯛脊切 土筆 な ふきのとう
- 焼物 よせ白魚
- 吸物 つくばね
- 取肴 塩引数の子 のり
- 香物 あさ漬大根

菓子 遠山もち

後座

花入 青竹尺八切

花 ぼけ

水指 木地釣瓶

茶入 利休瀬戸 銘初花 遠州書

袋 長楽寺裂

茶碗 大井戸

茶杓 貞置作 共筒

建水 さはり 棒の先

蓋置 青竹

薄茶（同席）

水指 時代菓罐

茶器 黒棗 宗哲作

茶碗 青磁人形手

茶銘 祝の白

惣菓子 紅白松葉³⁵

道具組みから四疊半以下の小間の茶席であると考えられる。初座の床の間には元伯宗旦（一五七八―一六五八）による一行書「梅開去年枝」が掛けられた。釜は宮崎寒雉（何代かは不明）による丸釜

である。初炭点前の時には木地台の炭斗、灰器は楽吉左衛門による素焼の焙烙、羽箒は鶴、鉄は火筋を用い、改まった印象を与える。香合は型物香合の一つである交趾焼の笠牛である。その後、懐石となり菓子は遠山餅³⁶が振る舞われた。

後座の濃茶では床の間の掛物が外され青竹尺八切の花入に木瓜が生けられた。点前の道具は木地釣瓶の水指、茶入は利休瀬戸、銘は初花（小堀遠州箱書）で袋は長楽寺裂が添う。

茶碗は大井戸である³⁷。茶杓は江戸時代初期に旗本で茶人でもあった織田貞置（一六一七―一七〇五）による共筒である。建水は砂張で作られた棒の先という形状のもので蓋置は青竹が用いられた。正月と祝意を重ねた格調高い道具組みであることがわかる。

薄茶も同席で行われ、水指が時代菓罐に替えられ、茶器は中村宗哲（何代かは不明）による黒棗、茶碗は青磁人形手である。茶杓の表記がないが、濃茶と同じ、貞置によるものか、別のものであるならば象牙などであったと考えられる。惣菓子には紅白松葉が振る舞われた。濃茶の格調高い空気から薄茶席では軽い雰囲気に変えられさせる惣吉の配慮が窺われる。茶会の会場は、かつて不昧から命名された茶室瑞鳳庵であると考えられる。この茶会は了我の茶会として確認できる点で重要である。

二 本惣の経営と理財

天保年間、本惣は江戸の道具商として一目置かれる存在となっていたが、その規模の大きさから、了我だけによるものだけではなく、一族の結束によるものと考えられる。そこで了我の一族に注目する。ただし、現時点で了芸らの活躍した時期を区分することは史料の不足からできない。

(1) 息子・了芸

了芸ははじめ藤吉を名乗り不昧の茶会にも多く参加している。先にも述べたとおり不昧没後は新発田藩主溝口家に入りました。というのも翠濤は小堀遠州二百年遠忌にあたる弘化三年五月に茶会を江戸中屋敷（幽清館）で開催している。この当時、各所で遠忌の茶会などの催しがあったようであるが、溝口家では遠州伝来の名物茶道具があることから翠濤によって行なわれた茶会である。この茶会では遠州が所持した「閑極法雲・東澗道洵両筆墨蹟」（個人蔵）、古瀬戸茶入銘「蛩」（畠山記念館蔵）が使用された。参加した客について『幽清館雜記』（第五卷）では五月二十八日の茶会に谷村可順（二八五七没）とともに「初て 本屋了芸」とあり、二人で参加していることが知れ、さらに了芸の初めての参加であったことがわか

る。また、この点から溝口家には了我、了芸親子が出入りしていたことが知れる。

了芸も父了我同様に箱墨書を残している。了芸による箱墨書がある作品では片桐石州作共筒茶杓銘「宗仙のおもかげ」（湯木美術館蔵。図13）や大鳥羽箒（個人蔵。図14）がある。



図13 片桐石州作共筒茶杓銘「宗仙のおもかげ」（湯木美術館蔵）



図14 大鳥羽箒（個人蔵）

了芸の活動で注目されるのは、了我、了芸親子による道具の見聞録となる『苦心録』や『麟鳳亀龍』を残していることである。

『苦心録』とは名物をはじめ諸家の所蔵する茶入、釜、漆工、楽焼茶碗、見聞した茶の湯道具に関する記録である。牧孝治『加賀の茶道』（一九八三）によれば『苦心録』とは了芸による手控を大阪の道具商であつた戸田露吟（生年不詳。一九〇五没）が名付けたものである。^⑧

『麟鳳亀龍』とは諸家が所蔵する道具を図版とともに紹介したもので所蔵を不昧とする作品のうち「増鏡」、「志賀」、「潮路庵」、「初祖」には「手前より納」と書かれ、本屋が不昧に取り次いだ道具とわかる。このような名品の道具の見聞録を残すことは、作品の状況を後世に伝えると共に、本惣が取り次いだ道具を記すことで、その足跡を残すものといえる。

ところで土浦市博物館所蔵の土屋家が所蔵した道具リストである『土屋蔵帳』の写本がある。そのうちの一つの写本について今回、木塚久仁子氏により資料の提供を受けた。奥書には次のような記述がある。

右相州公より諸侯始三都町人江御弘之節東都本屋惣吉なる人写置有理、今また東都山本佐兵衛殿より伝借写之置 嘉永五年壬子五月

『土屋蔵帳』に所載される道具が市中に流出した当時の記録などを、本屋惣吉が書写していたものがあつたようで、嘉永五年に山本佐兵衛（生没年不詳）から借覧したことが知れる。このような文献への関心からも了我、了芸の頃に高かつたことが窺え、道具に関する古典の文献や所蔵品リストに深い関心があつた足跡と捉えることができる。

② 新右衛門町の本屋吉五郎

霞兄^{かけい}老人（一八〇〇生。没年不詳）による、参会した茶会や見聞した道具の記録が現在、国立国会図書館に所蔵される『過眼録』である。同書第三九卷には、四月七日正午、中島暁河（生没年不詳）の茶会に了我、梅屋鞠塙^{きくわ}（一七六一—一八三二）、霞兄老人、本屋吉五郎（生没年不詳）が参会していることが確認できる。同書の題箋



図15 中興名物茶入「高取耳付」
（『大正名器鑑』より）

に書かれる干支に信を置けば、丙申は了我の活動した時期から、天保七年と判断され、了我八十四歳となることから吉五郎も相当の年齢であつたと考えられる。

ところで高尾山薬王院が所蔵する古文書を集成した『高尾山薬王院文書』中、「天保一一年 九月百味構連名」が所載され、そのうちの世話人の一人に「新右衛門町 本屋吉五郎」の名が確認できる。¹⁰⁾この点から、了我と同じく新右衛門町で活動していたことが知れる。吉五郎を巡っては中興名物茶入「高取耳付」(図15)に付属する添状には次のような記述がある。

高取耳付

覚

一金貳百円也 高取耳附茶入

箱書付宗甫公御筆

袋 唐物織留純子

古金らん山崎切

一金五十両 古芦屋筋釜

鉈金貳百五十拾両

右之通代金槌に請取申上候以上

本屋吉五郎〇印

川村様¹¹⁾

ここでは古芦屋筋釜の二品を川村家に売却し、その代金二百五十両を請求している。¹²⁾この点からも道具商であったことがわかる。吉

五郎は了我と共に茶会へ参会していることや、同じ町内に店を構えていた点から、了我の兄弟かその身内、もしくは独立を許された人物であると目される。

(3) 本惣の理財

これら本屋の一族の結束もあり、天保年間に本惣は道具商としてそれなりの規模を有していたことがわかる。道具の取り次ぎにより目利きの美術商として活動し、富商となつていくことが確認できる。その背景には、美術品の売上を運用する手法として、理財の側面があつたものと考えられる。そこで、まず本屋の経営状況とその後に関連を調査するため、江戸における財政および金融関係の資料から周辺をみていきたい。

まずは江戸の商人が幕府へ上納した御用金に注目したい。『江戸御用金上納帳』(三井文庫蔵)では文化十年、十一年に新右衛門町の本屋惣吉がとして二百両を上納しており、『御用金納帳』では、文化十年十二月十九日にやはり新右衛門町の本屋惣吉の名で、百五十両を上納している。¹³⁾この上納を行なった惣吉とは、時期から考えて了我と判断される。

嘉永七年(一八五四)に幕府への上納金の上納者を一覧にした『用金上納帳』(国会図書館蔵)には次のような記述がある。

一金七百兩

新右衛門町

本屋惣吉

内

金二百兩

寅十月二十日納

金五百兩

卯三月二十日納^④

本屋惣吉の名で安政三年まで納付されていることとなり、了我が長命であつたにせよ、この時には百三歳となり、やはり了芸による納付であると判断される。

このような御用金の上納はその後もあつたようである、安政元年六月二日、奉行所からの通達には次のようである。

六月二日

此度御用金被 仰付候町人共奉行所江

呼出、左之通申渡

町人 六拾四人

其方共儀、御城下ニ罷在、永世之御国恩難有心得、御用金、上納金等先年も出精致し候処、近来御用途御差湊、就中、海防筋之御入用者、先前御見合茂無之程之義、其上禁裏炎上、総而御入用高相重り候御場合より、此度御融通之ため、御用金被 仰付候、就而者其方共身上向手厚之趣者、常々相聞候儀ニ付、格

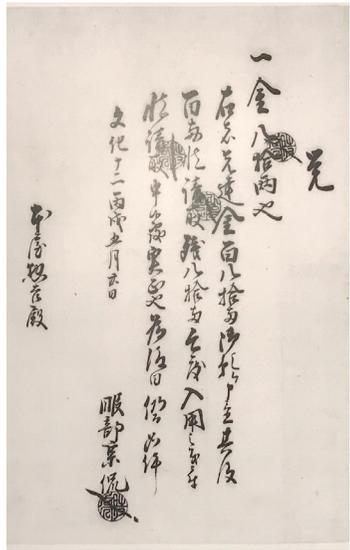


図16 服部宗侃金子請取覚 (天理大学付属天理図書館蔵)

別出精之廉際立候様可致、尤、金高并納方等之儀者、町年寄共より可申渡候、

但、此度御用金者勿論、文化度御用金共、追而御仕法相定、御下戻相成候間、其旨をも可存、

右御用金高相弁候上者、一時上納ニモ不限、繰合ニ寄、此節より兩、三度ニ割合、何月幾日何程、何程者来卯春迄ニ皆納之積を以請書差出、其日限金子南御番所江上納可致事^⑤

当時、禁裏の炎上など幕府が多額の金子を必要としたため身代がすっかりとした者に上納を申し付けていることがわかる。また同書の六月三日に呼出した名前の中には

七百兩 新右衛門町

本屋惣吉⁽⁴⁶⁾

と書かれており、了芸には七百両を納めるよう申し渡されている。

ところで、現在天理大学附属天理図書館が所蔵する、奈良の医家である服部家の文書のうち、服部宗侃^{そうかん}（時亮／一七七八一—一八八三）による「服部宗侃金子請取覚」（図16）には、次のような記述がある。

覚

一金八拾両也

右は先達金百八拾両御願い申主其後

百両慥請取残八拾両今度入用之処ニ付

慥請取申候處実正也為後日仍ち如件

文化十二丙戌五月廿日 服部宗侃

本屋惣吉殿⁽⁴⁷⁾

この証文は本屋惣吉が服部宗侃から金子百八十両を借用し完済したときのものである。百両は先に返済したが、八十両は必要であったため返済を延期したが、文化十二年五月に完済したという受け取りである。前年の文化十年と二十年には、本屋惣吉の名で幕府へ二百両を上納しており、金を必要とした了我親子は、百八十両の借

用を宗侃に申し込んでいたものと考えられる。

以上のような上納を可能とした背景には、本業の茶道具売買以外に理財活動があったものと推定される。そこで旧幕府引継書の中にある「町人身許一件」（国立国会図書館蔵）に注目したい。同書は慶応元年（一八六五）に書かれたもので、経済学者の大山敷太郎（二九〇二—一九七五）は「各町の名主から町奉行所宛に提出した、このとき御用金年賦課の対象とされた江戸町人の身元、つまり負担能力に関する調査を内容としたもの」であると紹介している⁽⁴⁸⁾。そのうち深川永代寺門前町の家持で薬種や両替を営んだ岡本屋正十郎（生没年不詳）の借財についての次のような記述がある。

一金 千五百両 但、利足年三步八厘

新両替町二ヶ所地面

家質書入 新右衛門町本屋惣吉方借入⁽⁴⁹⁾

書かれた年代は慶応元年（一八六五）であるが、それ以前より本屋方から借用のあったことが知れる。この点から当時の本屋が質商として手広く商いをしていたことがわかる。

このほか本屋の資産状況を示す資料として天保十二年七月二十六日、北町奉行遠山左衛門尉（景元／一七九三—一八五五）に遣わされた文書である「屋敷改通達書町奉行宛」（東京大学史料編纂所蔵）

に注目する。同書は「百姓名代抱屋敷ハ譲請可能ナル者へ譲渡サシム」もので、土地の所有を目指すものであった。その二日後である二十七日、町年寄の樽藤左衛門（生没年不詳）に達せられた「町奉行申渡書」（東京大学史料編纂所蔵）には次のような記述がある。

寺嶋村百姓豊吉名代ニ而同村内役人 新右衛門町家持
足賃銀附抱屋敷所持いたし候 本屋惣吉^⑩

寺嶋村に所有した本屋惣吉の土地は豊吉を名代として所有していたことがわかる。また同文書で請印している人物に注目すると「新右衛門町家持惣吉煩ニ付代 忠助」とあり、その代理として忠助が捺印していることがわかる。この点から当時の本屋が土地を取得する手法で資本を運用していたことが知れる。

このような御用金の上納は結果として、江戸の長者番付に本屋惣吉の名を登場させることになった。というのも嘉永七年発行の『東都持〇長者鑑』^⑪（早稲田大学図書館蔵）には

金七百両 本屋惣吉^⑫

とある。番付での資産の最高位は五千両で、本屋は三段目に位置付けられ、当時の江戸においては富裕な商人となっていたことが知れ

る一方で、番付に掲載されることで、その信用が高まっていたことも確認できる。この点は本屋が道具商であることに加え、質商としても活躍するに際して、その信用の高さにも繋がっていたものと考えられる。

このほか芸は、その家族についても伝聞が残されている。幕末期に彦根藩が情勢を知るために風聞を収集した『幕末風聞探索書』に、幕府の石方棟梁である亀岡石見家について「石方棟梁亀岡石見に係る風聞探索報告（御徒目付・御小姓目付）」には次のような記述がある。

上 石方棟梁 亀岡石見

四一、三才

右石見家筋の儀は御用由緒にて、先代は勝手向不如意既に多分の借財に恐れ、養子相談取組候者も無之程の処、当石見儀養子相成候後速に勝手向取直し、其上多分の貯金等出来候かに相聞、右石見身分の儀探索仕候処、出生出雲にて名前不相知得共神職の子にて、若年の頃江戸知るべへ便り罷出、^⑬同所に居り付、其後日本橋新右衛門町質渡世本屋宗吉方へ奉公に住込、同所に久しく相勤候うち、石見儀見体穩順にて諸事無如在取廻し候かにて、宗吉娘へ密通いたし^⑭一説には右娘の外、母へも姦通宗吉は所に通称本宗と唱相応身元宜敷者に付、石見の内心色情迄の徒事

には無之、金子をも引出し可申一計にも可有之か、此娘も深く石見を執心いたし、聳に成り金千両を貰らひ娘同道の上相応の株式をも相求可申含の処、衆人大借に恐れ亀岡の家より多分の借財を引受、夫婦養子に入追々借先へも掛合、尚宗吉よりも金子融通いたし候かにて速に身代取直し候上、西城御普請其後地震損の外度々御用も相勤、相応の職徳を得弥増金子立廻り候^②

記述から、この新右衛門町の質渡世本屋宗吉とは茶の湯道具を扱った本屋惣吉と同定される。亀岡家の先代は借財も多く、養子縁組をしようとも、なり手さえいない状況であった。今の石見が、養子になって、持ち直し、貯金もできるほどになったようである。かつて出雲の神職の子であった石見が、流れ着いて江戸に来た。この石見はその後、本屋で住み込みしばらく働いたが、惣吉の娘と密通し、さらにはその母親にまで手を出したが、娘の方は石見に執心した。石見は金を無心するのが目的であった。石見は惣吉の婿となり、千両の金を貰い、娘同道の上、道具商の株を要求してきたが、惣吉の周辺の者が恐れた。時を同じく石見家から借財を肩代わりする代わりに、娘夫婦と共に養子に出して、石見家を継がせた。その後、惣吉は石見家に融通し、同家の身代は持ち直した。石見家はその後幕府の作事御用を務めたという内容である。同書の記述にあるように亀岡石見が四十二もしくは四十三歳であるならば、その生

年は文政元年か同二年である。仮にこの出来事が石見の青春期の出来事であるとするならば、了我八十歳頃であり、了芸の妻子についての出来事と判断される。

了芸の娘を考えるにあたり、江戸文化の風俗研究家である三田村篤魚（一八七〇—一九五二）は文政二年二月十八日の「向島の仮装行列」をした柳家長右衛門の粹、鯉三郎の嫁となる人物が「新右衛門町の茶道具商本屋惣七の娘」と紹介している^③。本屋惣吉とは了芸のことをさし、その娘は複数人いたものと考えられる。

このように当時の本惣は江戸で有力な商人となっており、その家族についても富裕であったための出来事と解することができる。

むすび

本稿では本惣の起業から近代に至るまでを歴代の当主の行状からみてきた。本屋の当初は貸本屋で身を起こした惣吉であり、冬木家などに出入りしてその道具の売却取り次ぎを行ない、不昧に出入りしていた。不昧から瑞鳳庵の庵号を与えられ、名乗っていた。本屋の店舗が新右衛門町にあり、また茶会を別荘で開催していることから、瑞鳳庵の茶室もいずれかにあったものと考えられる。了我の生年が判明したことで九十歳という長命であったことがわかる。

本屋は江戸で御用金を幕府に上納しており、道具商としてそれな

りに成功していた。その一方で、道具の売却により、利益を得た本屋はその後土地の取得を目指した。これらに加え金銭的にも大きな余裕が生まれたものと考えられ、岡本家への借入も可能になり、質商としても活動していたことを確認した。このことは利益の運用という側面であると同時に、質種として茶の湯道具を扱ったものと考えられ、長期的な仕入れにもつながったものと想像される。いわば本屋の基礎は了我、了芸親子によって固められたといつてよい。

本屋の本拠地は新右衛門町であった。近代において本屋は太田姓を名乗るが、これは不昧らとともに帰府に際して四日市宿で宿泊した時点ですでに確認され、それを代々引き継いでいたものと考えられる。また先祖代々から営業していた本惣のあった新右衛門町を拠点に、多くの土地を東京で所有し、昭和十四年には貸地業も営む地主の立場であり、また多額納税者として富裕な家柄であったことが確認できた。このことは了我、了芸が茶の湯道具の売買のみならず、御用金の上納ができるだけの成功を収めたこととなるが、その背景には質商や土地の所有という理財活動が確認できたり、時には奈良の服部家から借財したりするなどといった経営状況も明らかとなった。特に宗侃の父は奈良で開業していた服部宗賢（一七五二—一八二〇）であり、文化年間宗賢は江戸にも定期的に診察所をもうけ診察していた。その時の記録は『桂香堂処剂記』（国会図書館蔵）で確認できる。本書で注目すべき点は、宗賢は桂川甫周（一七五一

—一八〇九）と親しく、甫周は不昧の侍医でもあり、大名物茶入「伊木肩衝」（個人蔵）を取り次いだ人物である。すなわち了我は不昧周辺の医師とも交流があったことが確認できる。

了我の時代、本惣は有力な商人となったが、その背景には若い頃の不昧との交流があったものと結論することができる。

謝辞…本稿執筆にあたり調査にご協力いただきました遠州茶道宗家、四日市市立博物館、根津美術館、湯木美術館、山陰合同銀行、株式会社ツムラ、国立国会図書館、中央区議会事務局（東京都）、東京大学史料編纂所、三井文庫、慶應義塾大学図書館、早稲田大学図書館、天理大学附属天理図書館、東京都立中央図書館、日本大学総合学術センター、寺師碩甫氏、木塚久仁子氏、個人のご所蔵家、同志社社史資料センター、同志社大学今出川図書館、要旨翻訳の教示をいただきました Makio Baur 氏に深謝申し上げます。

付記…本研究成果は平成二九年度および平成三〇年度、高梨学術奨励基金・若手研究助成（美術史）「近世江戸時代後期の美術品と移動に関する研究——溝口家を起点に」による。

注

- (1) 『原色茶道大辞典』八二九頁。
- (2) 冬木家とあるが正しくは冬木屋上田家である。
- (3) 藤田萬樹編『江戸現存名家一覽』、森銃三、中島理寿編、『近世人名録集

成」第二巻所収、勉誠社、一九七六年、三一六頁。

(4) 方外道人『江戸名物詩初編』、天理図書館司書研究部編『近世文学未刊本叢書』第三巻所収、養徳社、一九四九年、二八六頁。

(5) 中村作次郎『好古堂一家言』一九一九年、一一二—一二四頁。

「文化文政天保の頃は所謂大御所様の盛んな時代であつたから、道具屋にも中々豪らい人がありました、就中白酔庵観阿、本屋了我などは大分変わった人で、俗気を離れた商人であつたさうです、観阿、了我は共に松平不昧公の恩顧を受けた御出入商であり、又時には公の茶友でもあつたのです、茲には了我のことを少し申し上げます、了我は本名を本屋惣兵衛と申しますので、俗に本惣と云ひます、始め本屋の小僧をしてゐましたから、自然多少の本を読んで書画骨董が好きになり、遂に茶道具商となつた、恰も其頃不昧公が天下の名器を蒐めらるゝ時でして、多くの道具屋がお出入しましたが、了我は鑑識に長けて居る処から、或時古筆と了我の兩人を呼んで、宋元の書画二十余幅を鑑定させられました、了我は古筆にも劣らず鑑別したので、公に感せられて益々信用せられたと申すことです。」

(6) 高橋箒庵『東都茶会記』熊倉功夫、原田茂弘校注、第一巻、淡交社、一九八九年、五九頁。

(7) 高橋箒庵『東都茶会記』熊倉功夫、原田茂弘校注、第一巻、淡交社、二〇〇二年、五八頁。昭和二年五月二十九日の五友会参照。

「文化文政時代の麟鳳亀龍と云ふ四冊本名器録を著した本屋了雲は、道具の目利を以て当時盛名があつたので、或る大名の主侯が其鑑識を試さんと、一日名物茶入を丸裸にして他の雑器中に転がし置き、さり気なく了雲に見せたるに、彼は座に著くや先づ暫らくとて漱ひ洗手をなしたる上一々鑑別して是れは名物何々で、伝来は云々、箱書付は爾々と手に取る如く説明し、二十二品中唯一品適中せぬばかりであつたので、主侯も大に彼の鑑識力に駭服したと云ふ伝説がある。」

なお同書の解説（五九頁）では本屋了芸による『麟鳳亀龍』について次の

ように述べられている。

「本屋了雲が、草間直方の『茶器名物図彙』茶入の部を再編・追加して、名物茶入二八五点を集成した書物。各茶入の図を載せて詳細な解説を加えたもので、写本四冊が伝わる。了雲（生没年不詳）は江戸時代後期の町人で、了我の子。名を藤吉といい、日本橋で家業の道具商を営んだ。また松平不昧とも茶の湯の交流があり、不昧の茶会にもしばしば招かれている。」

(8) 松永安左衛門『桑榆録』『松永安左衛門著作集』第五巻、五月書房、一九八三年、二六—二六七頁。

「江戸深川の富豪冬木家が零落した時、本に包んで本を見せかけ家の人が内証で本屋に持ち出す。本屋の主人の惣吉が頼まれてこれを道具屋に世話する。そのうちにひとかどの目利きとなり独立して商売ができるようになり、晩年了我と号しこの人の目利きで凡器が名品になったりして骨董界に貢献するようになり、天保の年九十二歳で死んだ。その子の了芸というのがこゝまた目利きで「麟鳳亀龍」という本を著し、これは今でも道具鑑定の權威とされている。了芸の惣吉は古筆了仲と好友であつたが、安政四年六十九歳で父よりはやく死んだ。」

(9) 高橋義雄『近世道具移動史』慶文堂書店、一九二九年、一五頁。

(10) 高原杓庵『茶杓三百選』第二篇（大名芸林派篇）河原書店、一九七七年、五五頁。

(11) 満岡忠成「同心草8—冬木名物」『日本美術工芸』三九六号、日本美術工芸社、一九七一年、七二—七三頁。

「冬木家は、茶道具の蒐集で聞こえ、世に冬木名物と称されているが、たまたま本屋了我は同家の出入りであつた。本屋の屋号のように、もと了我は貸本屋、といつても高級な方で、諸大名や金持が出入先であつたが、冬木家が斜陽になると、その茶道具の取次にも与るようになり、その縁で、當時昇天の勢いで茶道具の蒐集をしていた不昧の邸にも出入りするようになった。その子が、幕末江戸における茶道具屋の大ボスである了芸で、父

子とも不昧とは殊に親しく、兩名の瑞鳳庵及び自直庵の号は不昧からの拝領である。」

- (12) 高橋龍雄「茶器の話」『日本趣味十種』文教書院、一九二四年、二二八―二二九頁。

「東都茶器商の重鎮山澄力蔵氏の話に、本屋がこの冬木道具を不昧公に売込んだ爲に、莫大の金をもうけ、沢山の金銀を箆に入れて、上から吊して地下の穴庫に蓄へ込んだといふ。今本屋了我のあととは、京橋区にあり、東京市の一等公民の富豪であるということだ。」

- (13) 斎藤博「質屋史の研究」新評論、一九八九年、一一一頁、附表「東京旧市内質屋一覽」より。近代の東京の質屋について『東京盛大有名質商一覽表』（一八九七年）および『東京府内質業者表』（一九一三年）からその屋号や正業、兼業を纏めたものうちに本惣を屋号とした新右衛門町の質店についての次のような記述がある。

「名前太田、屋号本惣、所在地新右衛門町、名前太田惣吉、専兼業質。道具商資産一〇〇〇（千円）」

- (14) 『三夢統録』東京大学史料編纂所蔵。

- (15) ただし、いつの時点から交流があつたのかは明らかにできない。

- (16) 高橋義雄編『大正名器鑑』第四編上、宝雲舎、一九三七年、二七―二八頁。図版が不鮮明なため読みは同書を参考にした。

- (17) 松平家編輯部編『松平不昧伝』中巻、箒文社、一九一七年、八九頁。

- (18) 『雲州名物』（『茶道古典全集』第十二巻）一九六二年、淡交社、三六九―四一五頁。

- (19) 所蔵元の教示によれば、付属する添状などはないとのことである。

- (20) 前掲注（18）『雲州名物』、三七九頁。同書では次のような記述がある。

伯庵 冬木 堀田 樽与左衛門 寛政 本惣 千両

- (21) 白崎秀雄『雲州蔵帳図鑑』別冊、歴史図書社、一九七五年、八五頁。

- (22) 松平家編輯部編『松平不昧伝』中巻、箒文社、一九一七年、一五二頁。

(23) 貞本義保、貞本義保編『今宮町志』今宮町、一九二六年、三四八頁。同書では今宮宗了の所持した茶室、宗了庵について次のような記述がある。

「茶人宗了旧居の遺跡は十萬堂の南隣にある。宗了一日雲州不昧侯住吉参詣の帰途を此の庵に待ち受けて茶を献じた。偶々床に寒菊がいけてあつたので、不昧侯は其の花の趣きを非常に愛でられ、之れを所望された、宗了は直ぐ其儘に献じた所が侯は大に喜び、何か望む所があらば遠慮なく取らせると曰はれたので、宗了は「茶室を建築しようと思ひますが、種々工夫しても良い思案が付きません、若し然るべき教へを給はらば非常の仕合に存じます」と答へた、侯は「承知いたしました」と快諾され、江戸へ還られてのち、専門の工匠に命じ案を作らしめ、其れによりて茶室が建てられた、それが宗了庵だと云ふことである。不昧侯の筆になる蕪青の画がその水屋の上の引違ひの襖に今も残つている。目下其庵は安土町木原氏の所有に帰して居る。」

- (24) 四日市市編『四日市市史』第一七巻、一四四―一四六頁。

- (25) 前掲注（24）。

(26) この作品について「松平不昧公遺品展覧会列品目録」では益田孝の出品作品として次のように所載される。

不昧公作園城寺花入二重箱包裂添銘昏鐘鳴

一、受筒青多樂院作歌並書付添

一、武蔵鑑文公写

- (27) 朝岡興禎、太田謹補『古畫備考』上巻、思文閣出版、一九七〇年、三五四頁。

(28) 松花堂による緻密な大津馬の絵が描かれ、澤庵宗彭（一五七三―一六四六）による賛は色紙に「なぞもかくおもに大津のうまれきてわれもうき世になれもうきよに」と書かれている。

- (29) 高原杓庵『茶杓三百選』第三篇（流儀篇）杓庵刊行会、一九五四年、六六―六七頁。

(30) 片倉鶴陵『静候堂治験』第三巻、文政五年刊。京都大学附属図書館所蔵
富士文庫蔵。

(31) 寺師睦宗『漢方医学講座（日本短波放送放送内容集）』第六八号、
一九九三年、六九―七六頁。

(32) 茶碗全体に薄作である。土は信楽の土を用いたようで、長石も混じって
おり、二箇所には大きな石ハゼに近い長石も見られる。この混ざり具合が
マール状になった部分もあつて、景色となつてゐる。高台も付けられ、
内側も少し削られてゐる。側面には「空中」と彫銘がある。箱の材質は桐
で根元に近い景色のある上質な部分が用いられてゐる。箱甲には次のよう
な墨書がある。

空中 茶碗

齋芝 印

了我による筆跡である。なお印には「碧雲台」とあり、益田鈍翁の旧蔵
を示す蔵印である。箱裏には次のような記述がある。

不二の嶺は問はても

空にしられけり

雲よりうへはミゆる

しら雪

古哥のころを

とりて

八十八翁了我誌之（花押）

了我八十八歳の時、すなわち天保一二年（一八四〇）に書かれたと判明
する。この筆跡から謹直に書かれており、花押も七十歳の頃と比較して変
化していることがわかる。

この古歌とは『新勅撰集』にみえる守覚法親王の歌である。その意図は
富士山を雪で描くことであり、茶碗全体に土の混ざり具合がマール状と
なつた景色が雪を彷彿とさせるためであらう。

(33) 茶杓を収納する箱には了我による次のような墨書がある。

愈好庵主人の

八十一翁了我

もとめに依て

贈之（花押）

了我八十一歳とあることから天保四年に愈好庵主人のもとに依じて
贈つたことが知れる。

(34) 西山松之助『近世文化の研究』（『西山松之助著作集』第四巻）吉川弘文館、
一九八三年、二七六頁。

一九八三年、二七六頁。

(35) 麻溪山本寛、愛山木全宗儀編『古今茶湯集』巻一、木全宗八、一九一七年、
七四―七五頁。

(36) この菓子箱は餡を求肥で包み、その上に砂糖がまぶしてある。形が遠山に
似ていることからその名があるとされる。

(37) これまでの筆者の調査では本屋了我による所持もしくは墨書ある井戸茶
碗を確認できていない。ただし了芸による書付のある井戸茶碗では銘「亀
山」がある。

(38) この茶杓は片桐貞昌（石州／一六〇五―一六七三）が桑山貞晴（宗仙／
一五六〇―一六三三）を偲んで作つた茶杓である。内箱は桐材で面取りし
ており、甲墨書は「茶杓 貞昌作」とあり、裏には不味により「宗関作
宗仙ノ面影とアリ（花押）」と書かれてゐる。二重箱も桐材で面取りされ、
甲には了芸により

貞昌茶杓 宗仙おもかけ 箱書不味古

と書かれ、さらに二重箱裏には貼紙には次のような記述がある。

天保四巳とし十月十日余前宅エ古筆

了伴様御出之節此茶杓御覧古極

之通正筆吟味相済

印

印の文字は調宇と読める。調宇については夏目成美（一七四九―
一八一七）が題辭を記した『塵取集』に注目すると、寛政三年に書かれた
成美の題辭では若い頃調宇老人と連句をし、親しく交流していたことが知

れる。調字老人による草稿に二代目調字が題をもめたことがわかる。「宗仙のおもかげ」の紙中に書かれる調字とは天保四年の時期から考え二代目調字と特定され、調字宅に了伴が参会し、茶約に付属する極めの鑑定を行なっていることがわかる。

- (39) 牧孝治『加賀の茶道』北国出版社、一九八三年、一七七頁。同書で紹介する苦心録の序文では「一玄庵露吟了雪居士手記」が掲載され、次のような記述がある。

「昔年加州ノ同業ノ者、本屋了雲〔芸〕ノ手控ヲ予ニ題号ヲ依頼ス、依テ苦心録ト名付クル。」

- (40) 法政大学多摩図書館地方資料室委員会編『高尾山葉王院文書』第二巻、法政大学、一九九一年、三五九頁。

- (41) 高橋義雄編『大正名器鑑』第五編下、大正名器鑑編纂所。一九二六年、七三―七四頁。

- (42) 同右、七三頁。
(43) 田中康雄編『江戸商家・商人名データ総覧』第五巻、終風舎二〇一〇年、四六一頁。

- (44) 『用金上納帳』国立国会図書館蔵。請求記号八〇六一八〇。

- (45) 石井良助、服藤弘司編『幕末御触書集成』第四巻、岩波書店、一九九三年、二九九―三〇九頁。

- (46) 同右、三〇四頁。

- (47) 「服部宗侃金子請取覚」天理大学附属天理図書館蔵。

- (48) 大山敷太郎「江戸町人の幕末御用金課徴の実態——慶応元年正月「町人身元一件」に徴してみたる」『甲南経済学論集』第一〇巻第三号、一九七〇年、八頁。

- (49) 同右、二二頁。

- (50) 東京大学史料編纂所編『市中取締類集』十四、東京大学出版会、一九八〇年、三五九―三六六頁。

- (51) 「東都持〇長者鑑」『江戸じまん』所収。早稲田大学図書館蔵。

- (52) 井伊正弘編『幕末風聞探索書』下巻、雄山閣、一九九九年、二八二―二八四頁。

- (53) 森銑三、野間光辰、朝倉治彦編『三田村鳶魚全集』第一五巻、中央公論社、一九七六年、二七二―二七三頁。